

埋葬墓のものとは異なり、統一性も見られないことから、副葬品の選定に関しても規制があったように思われなかった。

次に埋葬の平面分布についてであるが、この分析はテティ北の墓域においてどの地点に埋葬が集約されるかを確認するために行った。結果、メルルカとカゲムニという第六王朝期の宰相のmastaba墓の範囲内につくられた、中王国時代第十二王朝期のプタハ神殿の神官である、イフィとヘテプの墓の範囲へ集中的に埋葬が行われていることがわかった。これより、テティが新王国時代にメンフィスの主神であるプタハ神として信仰されていたことから、信仰の対象であるテティ王のピラミッド複合体付近に埋葬が行われたということが想起されるが、ウナス南の墓域でも近年報告されているように、実際は古い建物の壁体を利用して遺体の保護を期待したためにこの範囲に埋葬された例が多いと思われる。何より、出土遺物の中からプタハ信仰を示す物は確認されていない。テティ北の墓域に、単純埋葬墓が多く確認されていることに関しては、別の利用目的があったのではないだろうか。

以上の分析から、テティ北の単純埋葬を営んだ人々は、新王国時代の葬送概念を大枠では反映しながらも、国家規模での埋葬への統制などはなく、王族・高官たちとは異なる埋葬が行われていたことがわかった。だが、墓ごとに大きな副葬品の組成の差も確認されず、社会階層として大きな幅があるとは考えられないことがわかった。

今回はほんの一部の資料からの分析であるために、当該墓域の単

純埋葬墓の特徴を明確にすることはできなかった。今後は詳細な分析に耐えうる資料をさらに広範囲な地域から選定し、サッカラにおける墓域利用にどのような違いがあるかを考えることが必要である。

ヨルダン南部、先土器新石器時代B期、

ワディ・アブ・トレイハ遺跡の石器製作技術

—当該地域における位置づけと集落内での変遷—

長屋 憲慶

はじめに

ワディ・アブ・トレイハ遺跡（藤井純夫二〇〇八「新石器時代ヨルダンの移牧春营地—ワディ・アブ・トレイハ遺跡の第五次調査（二〇〇七）」『第一五回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会 pp.52-60）は、ヨルダン南部に位置し先土器新石器時代B中期に年代づけられる。遺跡の性格は、狩猟・農耕・移牧のための季節的な前哨基地とされる。貯水施設と灌漑農耕を目的としたダムを有し、遺構の切りあいと壁体の共有関係から住居群の新旧関係が連続的にとらえられている点で、本遺跡は南ヨルダンでも稀有な例である。

本稿の目的は、(1)ワディ・アブ・トレイハ遺跡出土石器のうち道具と石核について、南ヨルダンの同時期の遺跡と比較し、本遺

跡の石器組成の特徴を明らかにすること、(2) 集落内における道具組成の変遷を示し、特に、住居の建築技術が最高水準に達し、また動植物相が一変する画期において、道具組成がどのように変わるのか考察すること、以上二点である。

分析の方法
(1) 南ヨルダンにおける石器群の位置づけ

道具組成と、石核の剥離痕からみた石刃比率について、周辺に位置する同時期の遺跡であるベイダ(Beidha)、シュカラト・アル・ムサイダ(Shakarāt al-Musayd)、アイン・アブ・ネケイレ(Ayn Abu Nekhayla)と比較する。遺跡の性格は、前述の2遺跡は定住農耕集落、アイン・アブ・ネケイレは狩猟のための季節的な前哨基地とされる。

分析の結果と考察

道具組成の特徴としては、ワディ・アブ・トレイハは鋸歯状石器が二八・三%と最も高比率である。石鏃が二四・九%でそれに次ぐ。他遺跡と比較すると、鋸歯状石器の比率が突出している。石鏃比率は、キャンプ・サイトという同性格のアイン・アブ・ネケイレ(六一・〇%)の半分以下であった。総体的な道具組成は、定住農耕遺跡のベイダに最も類似し、鋸歯状石器の高比率が特徴的である。

石刃比率は、六三・四%を石刃が占め、アイン・アブ・ネケイレに最も類似する。狩猟を主な目的とするキャンプ・サイトでは、剥

離物の生産性と石鏃の製作に適した石刃石核が多用されたためであろう。つまり、石刃の高比率は遺跡の性格に由来する。道具比率に類似が見られたベイダでは、石刃比率が一〇%未満と低い。

(2) 集落内における道具組成の変遷
分析の方法

ワディ・アブ・トレイハ遺跡の住居群を4期に区分し、道具比率の変遷を検討する。集落内の時期は、各遺構の切り合い関係や炭素年代に依る。各期の特徴を以下に列記する。

1期 円形の小遺構から成る住居群。飲料水の確保を目的にした貯水槽を伴う時期。

2期 円形あるいは矩形の大型遺構とそれに付属する小遺構によって構成される住居群。ワディを利用した灌漑農耕を行うためのダムを伴う時期。

3期 矩形の大型遺構とそれに付属する小遺構によって構成される。

この時期、建築技術が最高水準に達する。動物相は、家畜サイズのヤギ・ヒツジが比較的多く出現するようになり、移牧の存在がうかがい知られる。野生動物骨の出土数はむしろ増える傾向にあり、さらに狩猟対象獣が大型化する(本郷一美二〇〇八「牧畜の発達と乾燥地帯への進出」『セム系部族社会の形成』No.9: pp.111-12)。植物相は、すべての植物利用が減少する(那須浩郎二〇〇八「ワディ・アブ・トレイハ遺跡二〇〇七年夏調査における植物遺体分析」『二〇〇八年度ヨルダン調査団研究発表会 発表資料集』金沢大学)。本

遺跡における建築技術と動植物利用の画期と考えられる。

4期 円形または矩形の小規模複合体から成る住居群。集落が縮小化する時期。

分析の結果と考察

2期から3期(画期)への変化に着目すると、狩猟具の石鏃が二一・四%から二八・〇%へと増加傾向を示す結果となった。これは、この時期の大型野生動物の狩猟の増加という動物遺体分析から得られた結果とも対応する。また、鋸齒状石器が増加し、削器が減少する傾向もみられた。

集落の縮小化の始まる4期においては、錐が増加するが、その変化の背景は定かではない。この時期を移牧あるいは遊牧的な行動が本格化する時期と仮定するならば、錐が、後の時代に展開する新たな生業である遊牧と相関性を持つ道具である可能性もある。

南ヨルダンにおけるワディ・アブ・トレイハ遺跡の位置づけと、集落内における道具の時期別変化という2点の問題設定のもと分析を行った。

本遺跡の道具組成は、鋸齒状石器が支配的であり、他の点では近郊の定住農耕集落ベイダに類似する。一方で、石刃石核の比率の高さはアイン・アブ・ネケイレに近く、狩猟を目的とする両遺跡の性格を反映しているといえる。

集落内の道具組成の変遷では、画期である3期に狩猟具が増加す

る結果となり、この時期に野生動物の狩猟が活発化したことが明らかになった。さらに言えば、大規模な住居の造営は、食料資源(特に植物利用)が減少した環境下において、より戦略的な狩猟活動がおこなわれていた可能性を示している。

二〇〇九年度 早稲田大学史学会 公開シンポジウム

問いかける歴史、そして現在

総合司会・趣旨説明

西洋史学専攻 村井 誠人

戦後日本史学・考古学をそれぞれに牽引してこられた安在邦夫・菊池徹夫・深谷克己の三先生が本年度末をもって定年を迎えられるにあたって、早稲田大学史学会では、歴史学に対する現在の若い学生の関心がやや減少している現状に鑑み、この節目を前にして、三先生の歴史学・考古学との関わりを具体的にお話いただくことで、歴史学の一層の魅力を提示する機会としました。

多くの知の営みが存在し、展開している現在、歴史学・考古学が、その中で、どのような位置にあり、これからどのようにあることが望ましいのかを考える必要があります。そして、歴史を考える力を育むことが求められています。歴史学という学問は、確かに個人的